JEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかる とともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、 交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.106 目次

施設紹介-川崎市夢見ヶ崎動物公園 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2-3
平成30年度油等汚染事故対策水鳥救護研修のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
森田正治先生への追悼文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5-10
小松泰史、須田沖夫、浅川満彦、梶ヶ谷博(敬称略)
森田正治先生を想う ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
寄付のお礼 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
事務局日誌 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

川崎市夢見ヶ崎動物公園

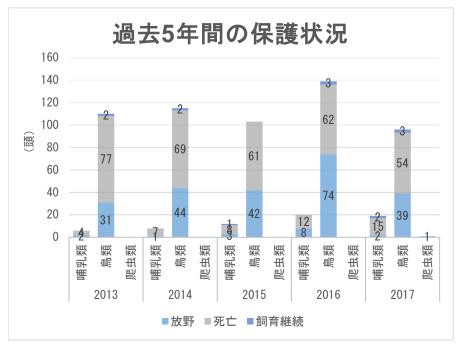
川崎市建設緑政局緑政部 夢見ヶ崎動物公園 飼育・診療担当獣医師 岡島 史絵

【施設概要】

夢見ヶ崎動物公園は、川崎市幸区にて 1972 年 11 月 22 日に開園した年中無休・入園無料の動物公園で、2018 年 7 月末現在、57 種 289 点の哺乳類・鳥類・爬虫類を飼育しています。動物園の位置する加瀬山は、住宅街の中にありながら緑が多く、植物、昆虫や渡ってくる野鳥などで季節の移ろいを感じられ、近隣住民の憩いの場や散歩コースにもなっています。

【野生鳥獣救護実績・活動状況】

夢見ヶ崎動物公園では、神奈川県鳥獣保護管理事業計画に基づき、保護された傷病野生鳥獣の治療から放野までを行っています。川崎市内を中心に、年間120件前後の傷病鳥獣の搬入があります。



鳥が子育てを行う5月上旬~8月上旬はスズメ、ツバメ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ等のひなの搬入が中心となり、年間を通してこの時期が最も搬入数が多くなります。そのうち多くが巣立ちびなの誤認保護で、発見時に電話等で相談があったり、発見直後に連れてきてしまったりした場合は、速やかに元の場所に戻すよう伝えていますが、発見者が自宅に連れて帰って数日間が経過していたり、木を伐採したら実は枝に巣がかかっていたりといった、親元に戻せない場合はやむなく預かっています。中には、長距離トラックにハクセキレイの巣が作られており、もちろん親はおらず、どこから連れてきたのかさえわからないケースもありました。

夏が過ぎると搬入件数は落ち着いてきます。交通事故や建物・電線等に衝突したと思われる哺乳類、鳥類は年間を通して搬入されます。また、風の強かった翌日は、海鳥やコウモリなどが搬入されることもあります。多くはありませんが、ネズミ駆除用の粘着剤に絡まった鳥類も季節を問わず、毎年必ずと言っていいほどやってきます。疥癬症のタヌキは冬季に比較的多く搬入されますが、一般市民が難なく素手で捕獲して、段ボール箱などで連れてこられるほど弱ったものが多く、生存率は低いです。

搬入された傷病鳥獣は動物病院の一角で飼育し、世話は獣医および動物病院に出入りする飼育担当職員で行います。保護動物の大半を占めるひなへの給餌が主な仕事となりますが、ひなが多い季節には、挿し餌の合間に園内の飼育動物の世話に出かけるような状況になります。その最盛期には、小さい動物園であるがゆえに職員の数も少ないため、手が何本あっても足りない忙しさになり、神奈川県の野生動物リハビリテーターの皆さんにお手伝いをお願いすることもあります。



写真1 スズメのヒナ



写真2 粘着剤のついたオオジュリン



写真3 カルガモのヒナ



写真4 タヌキの幼獣

幼鳥・幼獣の誤認救護の場合は自力で採餌し、鳥の場合は十分に飛ぶことができるようになったのを確認して放鳥していますが、ソフトリリースを行うための施設はなく、ほぼ人の手によって育った個体が野生で生きていくための訓練はできていないのが実情であり、課題の一つです。また、動物の種類にもよりますが、住宅地にある動物園近辺では放野できないものも少なくありません。放野のタイミングは本来、動物の状況が最優先となるべきですが、業務の合間を縫って、なんとかひねり出した時間で放野に出かけるため、思った通りのタイミングや場所での放野ができていないのも悩みどころです。

誤認救護したひなを元の場所に戻すことや、ツバメの巣が崩壊しても親があきらめずに子育てするよう手助けする方法など、電話や直接口頭などで市民に伝えるのも重要な仕事です。誤認救護が親から見れば誘拐である、という認識は少しずつですが浸透しつつあるように感じられます。また、すべての幼鳥・幼獣が育つわけではなく、多くは死ぬがそれも自然なことで、生態系のなかで役割はしっかり果たしているのだということも、丁寧に説明することで理解を示してもらえるようになってきました。一方で、身の回りに野生動物がいないと思い込んでいる市民も多く、「庭先にタヌキがいた」「猛禽類が飛んでいる」「ハクビシンを見かけた」のだがどうすればいい?…という相談を受けることもあります。工業都市として発展した川崎市には里山が少なく、ビルも建つ都会の街には、人間しか住んでいないと思ってしまうのかもしれません。実際には、人間以外の動物も同じ環境で生きていることを認識してもらうことが、彼らの生息環境を悪くしないよう意識することにつながるのではないかと思います。我々がそのきっかけになればよいな、と頭の隅で時々思いながら、普段は考える暇もなく活動に邁進しているところです。

平成30年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修のご案内

WR V事務局 齊藤 量子

近年、日本では全国各地で海洋における油等汚染事故が多数発生しています。そのため環境省自然環境局では、油等汚染事故などの発生時に、海洋保全と野生生物保護の観点から迅速かつ的確に対応できるよう、「油等汚染事故対策水鳥救護研修」を例年開催しています。

会員の皆さまには、是非、本研修にご参加いただき、そこで学ばれた事を職場や地元における 事前準備や実際の事故対応にお役立ていただきたく、改めてよろしくお願い致します。

研修の詳細案内および参加申込み用紙は、環境省水鳥救護研修センター・ホームページまたは 野生動物救護獣医師協会・ホームページからダウンロード可能です。ご質問等ございましたら、 環境省水鳥救護研修センターまでお気軽にご連絡ください。



リハビリプールの設置実習



生体を用いた洗浄実習

日 程:第1回:現場救護リーダー向け

第2回:現場救護リーダー向け 第3回:鳥獣保護行政担当者向け

現地研修:開催地は愛知県

*現地研修には実習がございません。

平成 30 年 9 月 18 日 (火)、19 日 (水) 平成 30 年 10 月 25 日 (木)、26 日 (金) 平成 31 年 1 月 17 日 (木)、18 日 (金) 平成 30 年 12 月 12 日 (水)

会 場:環境省 水鳥救護研修センター研修室 (第1~3回研修) 〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2 TEL 042-599-5050 FAX 042-599-5051 HP http://www.env.go.jp/nature/choju/effort/oiled-wb/

対 象:国・地方自治体の鳥獣行政等職員、鳥獣保護センター等職員、獣医師、鳥獣保護員、 動物園・水族館職員、水鳥救護に携わる関係者等

参加費:無料(参加のための交通費、宿泊費等は自己負担)

申込先:環境省 水鳥救護研修センター

〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2 TEL 042-599-5050 FAX 042-599-5051

主 催:環境省

請 負:特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会 (WRV)



森田正治先生への追悼文



野生動物救護分野における草分け的存在でおられた森田正治先生が、去る6月19日にお亡くなりになられました。そこで森田正治先生を偲び、各先生方よりいただいた追悼文を、ここに掲載させていただきます。

森田正治先生の思い出

現在の野生動物救護獣医師協会(WRV)は、1991年に東京都野生動物救護獣医師協会として設立されました。その当時、森田正治先生は農業共済組合の勤務獣医師であるとともに、1989年設立の「道東野生動物保護センター」を運営されておられました。

1991 年のACジャパンのテレビ広告において、「一頭一羽の命」というタイトルで、交通事故で右後肢を失ったエゾシカの保護を通して「でも何かをせずにはいられない」「自然環境保全は一頭一羽の命を救うことから」と呼びかけたキャンペーンは、WRV野口泰道初代会長、須田沖夫第2代会長、理事役員等に共通する認識でした。そこでWRVとしては、野生動物救護活動の最前線である北海道の森田正治先生や、先生が連携する野生動物救護研究会の黒沢信道さんや盛田徹さんと情報交換共有することが、今後のWRVの活動においても重要であるとの認識から、当時WRV理事で北海道の酪農学園大学酪農学部獣医学科卒の後輩(14 期生)である私が、連絡調整役として森田正治先生(2 期生)との交流を始めました。

WRVとの活動では、1992年の上野公園での「WRVワイルドアニマルレスキュー2」をはじめとして、その後のシンポジウム、報告会、講演会等で大変お世話になりました。森田正治先生は、1993年に農業共済を退職し森田動物病院を開院した後、大動物臨床、小動物臨床を家業としながら数多くの傷病野生鳥獣の救護活動をおこなうと同時に、野生動物保護活動に資する人材の育成「森田学校」に尽力されていました。特に「夏期野生動物保護セミナー」を動物病院開院と同時期に開催継続、2015年の夏期までの22年間で900名以上が受講したとの報告がありました。また日本各地の動物専門学校の講師等を務めておられ、東京で講義を行う際には、私の家に宿泊されたこともありました。その時にはいろいろな話をして教えていただいたことも多くありましたが、どちらかというと大学の12年後輩である私に対しては、2期生の先輩らしい口調で、時々まじめなご要望もありました。森田正治先生企画の動物専門学校での野生動物救護セミナーに、私が講演者としてご協力できたこと等もありましたが、ご協力できなかったこと、実現できなかったことも多々あり、今となってはなつかしい思い出になりました。

数年前に東京に来られた時、新宿の喫茶店で森田正治先生からご病気のことをお聞きしました。しばらくして少し活動をされていることをお聞きしましたので、お元気になられたのかと思っていましたが、このたび残念な訃報をお聞きし、寂しいかぎりです。ギターを持ち、情感豊かに歌っている森田正治先生の姿が今でも思い出されます。

森田正治先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(NPO) 野生動物救護獣医師協会 副会長 (公社) 東京都獣医師会 前副会長 (公社) 日本獣医師会 前理事 小 松 泰 史

森田正治先生を偲んで

森田正治先生がお亡くなりになったという連絡を、WRVより受けました。突然のことで、ビックリしました。森田先生は 2010 年に下咽頭癌を発症しましたが、その後病気に負けまいと頑張り続けておられました。しかしながら、本年 6 月 11 日の容体が急変したため釧路病院に入院し、医師による治療やご家族の看護の甲斐もなく、6 月 19 日の 9 時、静かに息を引きとられたとのことでした。葬儀の連絡も受けましたが、出席できず失礼いたしました。

森田正治先生は 1945 年 4 月、滋賀県で誕生した戦中派で、私より 1 ヶ月あまり前の先輩でした。北海道の酪農学園大学獣医学科で勉強中に、今の奥様と知り合い、1969 年に結婚されました。

獣医師になり、道東の中標津農業共済組合に就職し、乳牛を中心に診療を始められました。よく車で移動する途中、野生動物の交通事故等を見かけることも多く、そうしたことがきっかけで、1985年頃から野生動物の救護・診療を自宅などで始めるようになりました。一方、野生復帰ができない動物のため、収容する小屋やケージが増えていきました。野生動物の姿を人々に直接見てもらい、その教育的な価値を理解してもらうことを目的として、新たに森田動物公園をスタートしました。さらに、野生動物と人との関係等を世間にもっと知ってほしいと願い、1989年に道東野生動物保護センターを開設しました。当時から、奥様であるイク子さんも、動物の世話をよくやっておられました。

その後全国的にも、野生動物の保護、救護・治療などが話題となり出しました。東京でも野生動物の救護活動を実践していた野口泰道獣医師に対して、行政より組織化の依頼がありました。野口先生から私にも協力依頼があったため、野生動物に関心があり、その救護活動を実施している開業獣医師が集まり、1991年4月、東京都野生動物救護獣医師協会が創立しました。すぐに全国的に入会者が増えてきたので、名称から東京都をはずし、野生動物救護獣医師協会(WRV)として、環境省・水鳥救護研修センターの運営・管理、シンポジウム等の開催、各種研修会等の実施を中心に、現在も活動を続けています。

こうしたWRVの活動にも、森田先生には、当初から協力をいただきました。1992年には「WRVワイルドアニマルレスキュー2」シンポジウムを、上野公園内で開催しましたが、その際、森田先生が特別講演として、「道東野生動物保護センター報告」というタイトルで、エゾシカ、キタキツネ、ヒグマ、そしてワシ・タカ類など野生動物の救護活動例を多数ご報告くださり、参加者の多くが東京周辺との生息動物種の大きな違いを知ることができ、勉強になりました。

1993年には、森田動物病院を開業されました。その頃、北海道釧路市でラムサール条約の国際会議が開催されました。WRVからも、佐々木、植松、須田の当時の各役員と齊藤慶輔獣医師が参加し、北海道で活躍されていた森田先生や黒沢信道先生ら多くの方々と交流するこができ、様々な情報も得ることができました。特に水鳥等の鉛中毒の現状を知り、それを基に後日、WRVとして「水鳥の鉛中毒」というタイトルのビデオを作成、販売することとなりました。

1995 年の「WR Vワイルドアニマルレスキュー4」においては、「水鳥の鉛中毒の現状とその対策について考える」のパネルディスカッションの後、北の大地の自然を映し出したスライドをバックに、森田先生がギターを弾きながら自作の歌を歌ってくれました。森田先生は大学生になる前、京都などを中心にフォークソングが流行していたので、その頃から興味を持っておられました。乳牛の診療をはじめてから少し後に、根室で岡林信康氏のコンサートに行き、フォークソングへの興味が一層深まり、それからギターを人から借りて病み付きになりました。岡林氏は森

田先生の高校の一級下の後輩にあたり、知人でもありました。その後、獣医師仲間と「ザ獣医ズ」というフォークソンググループをつくり、楽曲を披露し、地域で話題のグループとなりました。

全国フォーク音楽祭の時には、北海道の帯広で開かれた一次予選にパスし、二次予選は札幌開催のため、録音テープを送ったところやはりパスし、最終的に決勝大会進出の5組に残られました。決勝大会には1万人もの聴衆が集まり、その中で曲を披露するも、惜しくも優勝を逃しました。その時優勝したのが、現在でも第一線でご活躍の、当時はまだ大学生であった中島みゆきさんでした。森田先生は、20年以上に渡って様々な歌を作られ、レコード化もされました。私も東京周辺で、何度もその歌声を堪能いたしました。

1997年には、ナホトカ号油流出事故が発生、事故対応の後、鳥類保護活動記録に関する緊急報告会を、WRVと国際自然保護連合との共催により開催。その中で森田先生には、ウトナイにおける活動の近況についてご報告いただきました。

森田先生は長年の活動の間に、「動物医ものがたり」「動物医日記」「野生動物レスキューマニュアル」など、多くの本も出版されました。

野生動物を保護・診療する時、リハビリの後、自然界に戻せることもあれば、残念ながら死亡してしまうことも、また生命は助かっても完治せず、その後も長期間に渡って飼育する場合もあります。飼育下にある障害を負った動物も増えていくので、それらを多くの人々に見てもらい、それを通じて自然界のこと、また多くの人々が時には野生動物を傷つけ、生態系を破壊してしまっていることと、一方でそうした野生動物と自然を守っていくことの大切さを理解してもらいたいという願いのもと、森田動物公園、野生動物救護研究会、道東野生動物保護センター、野生動物リハビリテーター協会、野付半島ネイチャーセンターを次々に創設。

そうした動きの中で、獣医学科の学生や動物看護師などのほか、野生動物の救護活動に関心のある方々を対象に、実技講習会や各種研修会を長年にわたり各地で開催されました。さらに、海外への視察研修会も何度も実施されました。私も 2010 年前後に、麻布大学や名古屋獣医師会館等で開催された野生動物保護に関わる講習会に、森田先生からの依頼で講師として協力しました。

森田正治先生は、日本における野生動物の保全活動、保護・診療、普及活動、そして後進の教育等、指導者の中心的存在の一人でした。

2015年6月、南多摩獣医師会の関係者と道東 旅行中に、森田先生のお宅にうかがい、いろいろ と話をしたり、野生動物を見せてもらったりしま した。WRVの佐々木泰造、池田純、大窪武彦の 各獣医師に私も加わり、大変楽しく過ごすことが できました。今ではなつかしい限りです。

森田正治先生には、いろいろとお世話になりま した。

どうぞ、やすらかにおやすみください。



野生動物救護獣医師協会 元会長 (公財)日本動物愛護協会 常任理事 須 田 沖 夫

<u>野生動物救護活動分野における</u> 故・森田正治先生の著述者としてご活躍

2016年6月、森田先生は、長年の「野生動物の保護と獣医系学生に対する教育活動」が評価され、酪農学園大学(以下、本学)大学院から名誉博士号を授与された。その際、著者は森田先生の業績をまとめ、学位申請書を作成させて頂いた。もう2年以上も前のことだが、今でもその偉大な功績に驚嘆したことを鮮明に憶えている。本拙稿では、紙面の関係からごく一部「著作、論文等」に掲載されていた一覧表を末尾に示した。表1のように1990年から、忙しい傷病動物の診療・ケアの合間、貴重な資料を文字に残していたことが判る。このエネルギーだけでも膨大なものであったと想像できる。日々の活動は、何もしなければ確実に雲散霧消する。そのような虚しさを味わいたくないという強い思いがあったと想像している。

森田先生は、著者にとっては野生動物医療の先達という以前に、本学獣医学科第2期生という大先輩である。卒業後、1970年代の農業共済組合(現 NOSAI)で乳牛の診療業務にあたっていた。しかし、シンガー・ソングライターでもあった森田先生は、本学学園祭などで、自作された歌をギターの巧みな演奏で披露していた(当時、フォークソングのブームの真っただ中であったのだ)。印象深い歌(されどタイトル失念)を1979年冬(著者が本学学部1年生の時)に聴いた。内容は生産調整対象となった廃棄生乳を、農家さんが乳飲み仔(トク)に飲ませ、その際、仔牛の口が真っ赤に染まるのを見て、思わず泣いたという歌詞であった(註:商品として横流ししないように、廃棄予定生乳には食紅を混入)。

1960 年代初頭、日本人の食生活は西洋化し、それにつれて乳肉の生産増大が国策であった。そのため、家畜診療獣医師が絶対的な不足状態をきたし、1964年、本学に獣医学科が設置された(次いで、北里大学にも設置されたものの、今般のような漠とした根拠ではなく、食生活という切迫した事態に後押しされ獣医大が出来たのだ)。

しかし、僅か 10 年と少しで、生乳が余るほどの状況になった。当時、乳牛の獣医師として、人生を捧げようとしていた、当時・壮年期の森田先生はどのような思いであったろうか。あの歌詞には、そのような悔しさ・憤りが満ち満ちていた。だからといって、それならば野生動物救護へ!ということではないと思うが、1994年 11 月、著者が本学の方針で野生動物医学も兼任することになり、森田先生に薄野のバーに呼び出された時、「このまま乳牛の診療獣医師で終わるのは辛かった」と告白された。そして、今、農畜産物の生産により大きな影響を与える TTP も締結され、1970年代以上に厳しい状況に突入しつつある。

一方で、野生動物医学会が創立四半世紀を迎えつつあり、獣医学会には新たな分科会が誕生、獣医師会は One Health という保全医学(野生動物医学の核となる分野)を盛んに喧伝している。新たな獣医大を加えた獣医学教育もコアカリを制定し、その中に野生動物医学が組み込まれた。そのような分野は、「バブルのあだ花」的、刹那的なものではない。もはや、完全に確立されたもので、避難場所ではない。そのような場では、相当な覚悟と強固な意志が必要である。もちろん、熾烈な挑戦的な場であり、あまり過去を振り返る余裕は無いと返されそうだ。しかし、その礎には、国策に翻弄されたが、類稀なる文才を備え、多くの若者を鼓舞し続ける先人が、北の大地にいたことを、忘れてはならない。

酪農学園大学獣医学群 教授 日本野生動物医学会 理事 浅 川 満 彦

表1. 森田先生による「著作、論文等」一覧(2016年4月、ご自身により作成)

- ・「動物医ものがたり~生命あふれる北の原野から」、みずち書房、1990年11月
- ・「動物医日記 北の大地の生命まもって」, こうち書房、1993年1月
- ・「北の原野の動物医野生のさけびを聞く」、くもん出版、1994年6月
- ・「北海道と環境保護(共著)」、札幌学院大学人文学部編、同大学生活協同組合、2003年月不明
- ・「野生動物のレスキューマニュアル・編/著」、文永堂出版、2006年3月
- ・「野付半島自然ガイド・編/著」、野付半島ネイチャーセンター、2007年7月
- ・「湿地への招待〜ウェットランド北海道(野付半島・野付湾を担当)」、北海道ラムサールネットワーク編、北海道新聞社、2014年9月
- ・「酪農ジャーナル」、1999年5月号~2000年2月10回連載、「酪農家と動物たち」
- ・「酪農ジャーナル」、2003年10月号、「酪農現場における鳥害の実態と対策」
- ・「JVM 獣医畜産新報」、1996 年 10 月号~1997 年 2 月号 4 回連載、「野生動物の臨床」
- ・「JVM 獣医畜産新報」、1998 年 4 月号~1998 年 8 月号 4 回連載、「野生動物の臨床~海鳥の油汚染救 護編」
- ・「JVM 獣医畜産新報」、2000年6月号、「有珠山動物救護センターの活動」
- ・「JVM 獣医畜産新報」、2010年4月号、「野生動物保護施設ネットワークが名古屋で初のボランティア養成講座を開催」
- ・「JVM 獣医畜産新報」、2012年7月号、「ケニア紀行~サバンナの動物・マサイの人・スラムの街」
- ・北海道獣医師会会誌、「南米・世界遺産の旅」、2014年3月号
- ・北海道獣医師会会誌、「夏季野生動物保護(臨床獣医学・看護)セミナー20周年の報告」、2014・5月号
- ・「モーリー」「北海道遺産~②野付半島と打瀬舟」北海道新聞野生生物基金、2007・夏号
- ・「モーリー」「野生生物の受難~⑦野生動物のレスキュー&リハビリ活動の現状と課題」北海道新聞野生生物基金、 2009 年・冬号
- ・「モーリー」「北海道に残したいもの/海岸線に息づく生命~③野付半島の希少生物とエゾシカ問題」、 2013年・冬号
- ・「モーリー」「外来生物の駆除、防除策~④野付半島の外来生物の駆除、防除策」、2014年・冬号
- ・「北海道の自然」「野付半島や道東の自然公園での緊急課題②鳥インフルエンザの発生」2009 年度北海道自然保護協会会誌
- ・「北海道の自然」「エゾシカ問題の考察—資源活用(野生鹿)と産業化(家畜鹿)を例に」、2012 年度北海 道自然保護協会会誌
- ・プロ・ナトゥーラ・ファンド第 20 期助成成果報告書「野生動物レスキュー&リハビリ・ボランティア養成」、自然保護助成基金、2013 年 11 月
- ・プロ・ナトゥーラ・ファンド第 21 期助成成果報告書「野生動物保護と自然の研修」、自然保護助成 基金、2013 年 11 月
- ・北海道新聞「獣医さんのこぼれ話道東版」2006年11月~2008年7月、連載のうち6回
- ·釧路新聞 「巷論」、2010年5月~2012年2月 月一回連載
- ・釧路新聞「番茶の味」、2012年8月、一週間連載
- ・釧路新聞 「ネイチャートピックス」→「ネイチャーガイド」月一回、2007・1~現在(*)
- ・「月刊新根室」「森田まさはるの動物と自然」、1989年6月~現在

*:本一覧表作成時

森田正治先生を偲ぶ

野生動物救護獣医師協会事務局からこの追悼記事の寄稿依頼を受けて、改めてそれまであまり 意識したことがなかった森田正治先生と私との関わりについて振り返ってみた。

その結果、私の場合はWRV研究部としてのお付き合いはほとんどなく、もっぱら日本獣医生 命科学大学の野生動物系教員という立場で一方的に先生にお世話になってきたのだと気づかされ た。それはもちろん、先生が北海道で長年主催されてきた野生動物の研修にまつわるものである。

森田先生が主催されていた野生動物研修に本学の学生たちを参加させて戴くようになったのはいつ頃からだったのか、じつは正確なところを覚えていない。たしか、最初の頃は研究室の学生が個人的に、北海道で森田正治先生という方が主催している野生動物の研修に参加したいが、どうすれば良いかという相談をしてきたのだったと思う。私は野生動物救護獣医師協会の関係で先生と個人的に親しくして戴いていたことから、その学生を推薦したという経緯ではなかっただろうか。

ところがそんな学生が毎年私のもとへとやってきて、あまり考えずにその都度先生に話を通していた。しかし無責任なことに、私自身は失礼ながら最後まで一度も研修の現場を見学せずに終わってしまったので、どんな研修内容なのかも実体験としては知らずにいた。もちろん、実際に体験してきた学生たちに話を聞いたりしていたし、森田先生のお人柄も実績も承知していたので、研修の中身をぼんやりとは理解し信頼もしていた。当然のこととして過去の参加者にはすこぶる評判が良く、それが口コミで学生間に伝わって例年盛況だったのであろう。全国から参加希望者が集まったこともよく理解できる。一方で、私自身も野外実習等を授業として主催してきた立場なので共感できる部分があるが、長年にわたり野生動物の野外研修を継続させること自体が、相当のご苦労であったはずである。それを想像するのは容易い。そして何より、本来の獣医師としての仕事をこなしながらの話なのである。それには、かなりの覚悟と信念がなければ到底続けられまい。そんなことを思うとたしかに頑固一徹な先生であったなと、思い起こせばいろいろと頷けた。徹底的に学生を思いやり、野生動物に関心を寄せる若者を育てることに生涯情熱を注ぎ続け、貫き通したのが森田正治という人物であったのだ。

これまでの感謝とともに森田正治先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

日本獣医生命科学大学保全生物学 元教授 野生動物救護獣医師協会 研究部長 梶 ヶ 谷 博

森田正治先生を想う

去る6月19日に、その一生を多くの野生動物の救護あるいは保全のために捧げてこられた森田正治先生がお亡くなりになられました。

私自身も、森田先生には20年以上前からお世話になってまいりましたが、 今も思い浮かびますのはやはり溌剌としたお姿で、旅立たれてしまったことが 未だに信じられません。

森田先生に最後にお目にかかったのは、昨年9月に、日本獣医生命科学 大学で開催された日本野生動物医学会の大会の時でした。当日、森田先生 は「道東野生動物保護センターの23年間の野生動物保護教育の報告」とい



うタイトルで発表をなされましたが、長年に渡る活動を総括されるような内容で、おそらく先生の胸にはそれまで経験されてきた様々な事柄、そして想いが去来されていたのではないかと想像されました。その時のお姿は、少々痩せられた印象はありましたが、次のステージに向けた新たな決意を秘めておられるようにも、私には感じられました。

さりながら、ご一緒できたのがあの日が最後となってしまったのは予想外のことで、やはり悔やまれてなりません。 これからは、直接お話しをうかがうことはかなわなくなってしまいましたが、今後WRVの活動を実践していくにあたり、 おそらく、何かにつけて森田先生のことを想い浮かべていくことになるに違いありません。どうぞ天上から、私たちを いつまでも見守っていただければ有難く存じます。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(WRV事務局長 箕輪 多津男)

【 **事務局より寄付のお礼** 】 <u>寄付ご協力者(敬称略)(平成 30 年 6 月 1 日から平成 30 年 8 月 31 日)</u> ○寄付金(一般) 2018.8.21 白倉 豊 5,000 円

事務局日誌 2018.6.17~2018.9.15

=== 6月 ===

17:(公社)東京都獣医師会 第7回定期総会(ホテルルポール麹町) 出席:新妻、小松 18: 神奈川県鳥獣総合対策協議会(神奈川県庁)[神奈川支部] 対応:皆川 21:かながわボランティアフェスタ実行委員会(県民センター)「神奈川支部] 対応: 皆川 22:第75回日本獣医師会総会(明治記念館) 出席:小松 22: わいわいサロン(神奈川県野生動物リハビリテーター交流会)[神奈川支部] 対応: 皆川 23,24:神奈川県野生動物リハビリテーター・見学会&ヒナのさし餌実習(金沢動物園)[神奈川支部] 対応:皆川 25: WRV ニュースレターNo.105 発行 対応:小松、箕輪、齊藤 28: 東京環境工科専門学校生·野生動物救護実習(東京環境工科専門学校)[神奈川支部] 対応:皆川 29: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] 対応:皆川 30~7/1:「第5回コウノトリの生息を支える市民交流会」(豊岡市) 出席:箕輪 30: 神奈川県野生動物リハビリテーター養成講習会·実習(川崎市夢見ヶ崎動物公園)「神奈川支部] 対応:皆川

=== 7月 ===

01,07,14,: 神奈川県野生動物リハビリテーター養成講習会・実習 (川崎市夢見ヶ崎動物公園) [神奈川支部] 対応: 皆川 02~05: 帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習 (上野原キャンパス、環境省水鳥救護研修センター) 対応: 皆川、箕輪、齊藤 04: 平成 30 年度 第1回アライグマ・ハクビシン対策作業部会 (東京都庁) 出席: 加藤 06: WRV 事業打合せ・文書確認等 (東松山市) 対応: 新妻、箕輪

08: 夢見ヶ崎動物公園サポーター会議 (川崎市夢見ヶ崎動物公園) [神奈川支部] 対応: 皆川

08: 第171回麻門会(麻布大学)

出席:新妻

09~12: 帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習(上野原キャンパス、環境省水鳥救護研修センター) 対応: 皆川、箕輪、齊藤

15,16,24,25,29: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] 対応: 皆川

16:神奈川県野生動物リハビリテーター養成講習会・補講(犬猫・野生動物救護センター)[神奈川支部] 対応:皆川

TOTAL MANAGEMENT OF A MANAGEMENT OF THE MANAGEME

対応:皆川

19:東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習 (環境省水鳥救護研修センター)

対応:皆川、箕輪、齊藤

26:神奈川県野生動物リハビリテーター・見学会(神奈川県自然環境保全センター)[神奈川支部] 対応:皆川

27: 帝京科学大学・野生動物と展示動物の福祉・講義(千住キャンパス)

18: 東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習(東京環境工科専門学校)

対応:皆川

30:練馬区西青色申告会 理事会(西青色申告会事務所)

出席:新妻、町田

=== 8月 ===

01: 税務六団体交歓会(勤労福祉会館)

出席:新妻、町田

01,02,03,06,07,13,14: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] 対応: 皆川

04: 吉田公一・元衆議院議員告別式

出席:新妻

07: 事業打合せ ((公財)日本鳥類保護連盟)

対応:箕輪

08: 平成30年度 第1回アライグマ防除実施計画検討委員会(万国橋会議センター)

出席:加藤

18:神奈川県野生動物リハビリテーター・見学会(よこはま動物園ズーラシア)[神奈川支部]

対応:皆川

19:環境教育プログラム実践講座・第2回(犬猫・野生動物救護センター)[神奈川支部]

対応:皆川

21: 日野市郷土資料館・企画展協力 打合せ (水鳥救護研修センター)

対応:箕輪、齊藤

23: 平成 29 年度WR V事業報告書提出(東京都庁)

対応:箕輪

24:書籍「災害動物医療~動物を救うことが人命や環境を守る~」発行(ファームプレス)

対応:羽山、皆川

26:第6回大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第1回講習(ペピイ動物専門学校)[大阪支部]

対応:中津

27:わいわいサロン(神奈川県野生動物リハビリテーター交流会)「神奈川支部」

対応:皆川

30: 丹沢大山自然再生委員会県民事業専門部会(万国橋会議センター)[神奈川支部]

対応:皆川

31~9/02:第24回日本野生動物医学会大会(大阪府立大)

出席:羽山、加藤、金坂、皆川

=== 9月 ===

04:日獣大獣医学科・野鳥及び水鳥生態講義(日獣大)

対応:加藤、箕輪

05:日獣大獣医学科・野鳥救護実習(水鳥救護研修センター)

対応:羽山、加藤、皆川、齊藤

06:日獣大獣医学科・水鳥救護実習(水鳥救護研修センター)

対応:加藤、皆川、箕輪、齊藤

09:神奈川県野生動物リハビリテーター認定式 (川崎市夢見ヶ崎動物公園) [神奈川支部]

対応:皆川、箕輪

11~13: 第161回日本獣医学会学術集会(つくば国際会議場)

出席:羽山、加藤

14:かながわボランティアフェスタ実行委員会(県民センター)「神奈川支部]

対応:皆川

15:練馬区西青色申告会 青木泉会長お別れ会(妙福寺)

出席:新妻、町田

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ)http://www.wrvj.org/ (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 106 2018.9.25 発行

発 行:特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局: 〒190-0013 東京都立川市富士見町 1-23-16 富士パークビル 302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人:新妻 勲夫 編集文責:小松 泰史 編集担当:箕輪多津男